
ラブコメは他所でやって！ serial addition

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブコメは他所でやつて！ serial addition

【Zコード】

Z6413E

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

誓つてもいい、あたしはいたつて普通だった。それなのに……なんでこんなことになってしまったんだろう？！　ラブコメ、と見せかけた青春スポーツもの、でもないような。　キャラクター原案・和藤渚さま　本文・早村友裕

嵐の前のプロローグ（1） 今井俊太（前書き）

この作品は、針井龍郎さま主催の「シャツフル企画」から生まれたものです。

他の作者さまが提案したキャラクターを元に短編を書くという企画でしたが、原案の和藤様がくださったキャラ達が、短編で終わらせるには惜しかつたので、このような形で連載することにしました。

前半は依然投稿した短編を推敲しただけのものですが、もしよろしければ深く考えずに最後までお楽しみください！

08・7・12 早村友裕

きっとポテンシャルはあつたに違いない。認めたくなどないけれど、だつて、あたしの周りには何しろそれっぽいヒトたちがたくさんいたんだから。

けど、誓つていい。

あたしはいたつて普通だつた。

中学の時少しばかりみんなより勉強ができたからそれなりの進学校に入学して、少しばかり絵が好きだつたから美術部に所属して、少しばかり世間に疎かつたから特別目立つわけでもなく、だからといつていじめのように無視されるというわけでなく平凡な毎日を過ごしていた。

それなのに。

どうしてこんなことになつてしまつたんだろう？

それはずつと分厚い雲が覆つていた空が少しずつ晴れやかさを増し、テストさえ終われば世間一般的な『青春』の代名詞、17歳の夏がやつてくるつていう、素晴らしい季節のことだつた。

その嵐の警鐘はあたしの気持ちになどお構いなしに唐突に、そして高らかに鳴り響いた。

テスト一日前、放課後の美術室。

こんなところにやつてくるのはあたしからいのものだ。それなりの進学校であるこの荒神高校の生徒であるならば、図書館、または帰つて家でまじめに勉強するのが普通だらう。

そうでなくとも、美術部なんて幽霊部員ばかり。まじめだった3年生の先輩たちが本格的な受験勉強を始めてしまつてからはほとんど1人で活動していた。

どこか埃っぽい、しかし絵の具の匂いに満ちた空気が迎えてくれる。いくつものキャンバスが描きかけのまま放置されている。スケッチ用の壺や、人間の上半身を象つた石膏像が後ろの棚の上にずらりと並んでいた。

いくつもの石膏像の視線を受けながら棚の前を横切り、日が差し込む窓辺にカバンを置く。そして、いつも持ち歩いているスケッチブックを鞄から取り出した。

ぱらぱらとめぐると、最初の方のページはほとんどが同じ人物の絵で埋められている。正面、横顔、全身の画も、後ろ姿まで様々な角度から描かれている。

「本当に……綺麗なひと」

このスケッチブックに描かれた先輩は、性格には難ありでもモデルとしては一級だつた。だから、あたしはその造形的な美しさに魅ひかれて、何度も何度もスケッチした。

一つ一つ、丹念に手をかけて創られた美術品のように左右整つた目鼻立ち、180cm以上はあるだろうすらりとした長身、すべての女の子を虜にしてしまうであろう柔らかな微笑み。

それも、モデルになつても見られていることを意識せず、照れずに自然な表情でいられるという天性のナルシストだった。

「はあ……」

あの性格さえなければね。

ぱたん、とスケッチブックを閉じた。

そして、今日もしばらくキャンバスに向かつて、入学してから何度も何度も繰り返してきた壺のスケッチでもしてから帰るつもりだった。

ところがそうはいかなかつた。

カラカラ、と軽い音を立てて美術室の戸が開く。

普段なら誰が来ることもない美術室にやつてきたのはいつたい誰？ そう思つて振り向くと、そこに立つていたのは 天使のように愛らしい少年だった。

大きな目をきょとんとさせてこちらを見ているのは、クラスメイトの今井俊太。
いまいしゅんた

女子として平均よりずいぶん低身長のわたしよりも5㌢は低いだろう。小さな丸顔と愛らしい童顔のせいで、まるでテレビに出ている子役のようだ。パステルカラーのフード付きパークーの袖から小さな手が半分くらい覗いている。色白の肌の中に頬がかすかに色づいていた。丸い目と小さめの鼻と口が完璧なバランスで顔の中に配置されている。色素が薄く焦げ茶色に近いサラサラの髪もよく似合つている。

「今井くん、珍しいね」

とても同じ年とは思えないほど幼く見える彼は、その容姿からクラスのマスコット、またはペット的存在としてみんなから可愛がられている。

また、この可愛らしい少年は、美術部と吹奏楽部を兼部している。そのためこのままでいたに顔を出さないのだが、何か月も見ていない幽靈部員たちよりはよっぽど部員らしい部員だった。

「」

おずおず、と美術室に入ってきた彼に「」と笑いかけた。

「吹奏楽部の方は？」

「今日はテスト前だからお休みだよ」

吹奏学部は多忙だ。この期末テストが終われば高校野球の応援と夏のコンクールが待っているはずだった。

「久しぶりに絵が描きたくて、やけやつた」

はにかむように笑つた顔も完璧だ。男とか女とか、そんなものもすべて超越している。

この子は、平凡なあたしにとつて唯一の癒しだった。この愛らしい子と少し話して、少し近くにいるくらいには許されるよね？

「隣でぼくも描いていいかな？」

「いいよ。今日はきっと誰も来ないはずだしね」

「ありがとー！」

やう言つてにこりと笑つた今井くんを見て、決めた 今日のモチーフは彼にしよう。うん、きっとそれがいい。

そして、この間描いたティティベアのラフスケッチの横に飾るとしよう。

その時、再び美術室の扉が開いた。

嵐の前のプロローグ（2） 川島耕太

今日はお客様の多い日だな……と思つた時。

「やあ、久しぶり！」

振り返る前に声が飛んできた。

やあ、なんてわざとらしいセリフ、本気で口に出す人間は一人しか知らない。できればこのテスト前には聞きたくない声だった。

「……お久しぶりですね、川島先輩」

「おや、つれないな。きっと君が一人で暇をしていると思つて構いに来たというのに」

「どうせ先輩が受験勉強に飽きたんでしょう。美術部員でもないのに息抜きにこの部室を使わないでください。受験、落ちても知りませんよ？」

ため息とともに振り返ると、スケッチブックの大半を占めている姿がそこにあった。

「相変わらずのツンドラ気候だねえ」

意味不明のセリフを吐いてひよい、と肩をすくめたのは川島耕太
先輩 この荒神高校では最も有名な3年生。

有名な理由はやはり、この姿にある。ついこの間までバスケットボールを務めていたため、すらりと引き締まった長身の持ち主で、またモデルを自ら申し出るほどに整った顔立ちをしている。それだけでどこにいても目立つというのに、頭に超の付くほどナルリスト。

身長151cmのあたしにとっては、かなり見上げなくてはいけない相手だ。

しかしながら、見上げた顔はやつぱり男前だった。視線に気づいたのか先輩の口角が少し上がる。

「見とれているのかな、風見響子さん？」

「そうです」

ただし、あたしがこの先輩の顔をまじまじと見るとときは、美術品を鑑賞するときと一緒にだ。美しいものを見る。ただ、それだけ。

「君はいつもそうだな。俺を真っすぐに見ている。他の女の子たちは真っ赤になつてすぐ田を逸らすというのに…」

「赤くなる理由も田をそらす理由もありませ」

「だが、いくらでも眺めてくれて構わないよー。俺も鏡の中の自分の顔を見飽きることはないからな」

「……帰れ。もしくはヒートの話を聞け」

ぼそりと本音を呴いたが、川島先輩には届かなかつたようだ。じろじろとあたしを見下ろして、ぽん、と頭に手をおいてしみじみと息を吐いた。

「しかし、相変わらず君は小さいな。そんな身長できちんと世界が見えているのか？」

「つづ！」

お前がでかすぎるんだ。そんなセリフは飲み込んだ。

軽く頬がひきつったがこんなことで心を乱していれば川島先輩の相手はつとまらない。

平常心、平常心。

「世間では牛乳を飲めばいいと言ひついから試してみてはどうだ？」

「もつ伸びません。成長期は過ぎました。それに牛乳飲んで背が伸びるなら、今頃は世界中の仔牛がハ頭身ですよ？」

「ああ、だがそれでは伸びるまでに時間がかかるな。それまでこんな姿でいるというのは非常に不憫でならない」

「人を勝手に不幸にしないでください」

「それじゃあてつとり早く……引っ張つてみてはどうだ？」

「心配ありがとうござります。でも、本当に不便してないので丈夫です。そんな暇があるなら世界が100人の村だつたらどうなるかってことについてでも考えてください」

そう言つと、川島先輩は整つた唇を子供のように尖らせた。

「君は**わがまま**我儘だな」

「……つー」

むかつとしたが、何とか抑える。

平常心、平常心。

しかもこれらの台詞がいやみでも挑発でも何でもなく、心の底から出でいることも分かっている。

この先輩は本気であたしの身長について心配してくれているのだ。そのうちあたしの首をつかんで引っ張りだす、という事態にもなりかねない。

まあ何にせよ、この先輩の相手は面倒だ。おとなしくモデルになつていってくれれば全く問題ないが、テスト一日前の今日、あたしも

早めに帰りたかった。

はあ、と大きなため息をつく。

これはナルシストといつより自信家だらうか。

もちろん言葉通り、川島先輩の成績は学年でトップクラスだ。それは知つていてる。

顔がよくてスポーツができて勉強ができたらどうしてもこんな人間が出来上がりてしまうのだろうか？ それなら、神様はもう少しでいいから能力の配分を考えた方がいい。

川島先輩はなぜか上機嫌で美術室を見渡し、突然の訪問者に呆然とたたずんでいた今井俊太に目を止めた。

「誰かいたのか。せっかく一人で寂しくここにいる君の相手をして俺の評価を上げようという計画が台無じじゃないか」

「先輩、考えることが全部口から洩れてますよ？」それにそんな

ことであたしの中の先輩の評価が上が

「そこの君！ いつたい誰だつ！」

……と思つたら大間違いつ、最後まで人の話を聞けーつ！

いやいや、平常心平常心。

ひとつ、深呼吸。

「あたしのクラスメイトです。美術部員だけど、吹奏楽部と兼部してるから川島先輩は初めて会うかもせんね」

「あ、やっぱりあなたが川島先輩だつたんですね」

先輩の大聲とオーバーアクションにびくびくして窓際に寄つていた今井くんは、少しほつとした顔をしてこちらに近づいてきた。うわ、身長差が目測で約40cm。あたし以上の身長差だ。きっと先輩は今井くんの旋毛つむじしか見えてないに違ひない。

しまつた、今井くんの首を掴んで引っ張りだす前に引き離さねば

……！

ところが。

なぜかここで、予想外の事態が起きた。

「はじめまして、川島先輩！」

首いっぱいに見上げた今井くんがにこり、と微笑んだ瞬間。
先輩の動きが停止した。

いつもなら笑みを湛えている口元が、茫然と開かれている。綺麗な形をした眼が大きく見開かれていく。何より、頬がみるみるうちに真っ赤に染まつていった。

「はつ、ははは、はじめつ……まして！」

川島先輩が異常なまでに緊張した口調でそう絞り出した。この人がこんな様相を呈するのは、後にも先にもこれつきりだった。その様子を見て今井くんがきょとん、と首を傾げる。

うつ、これは……！

あたしの中で警鐘が鳴り響く。

人が恋に落ちる瞬間を見てしまった　なんて、どこかの少女漫画だ、それは！

確かに今井くんは童顔で、笑った顔なんて本当に女の子のように愛らしいと思う。私服登校のこの高校において、男だと思われるより女に間違われた回数の方が多いんじゃないだろうか。

彼が少々、いやかなりほんやりとした性格で、間違いを否定しないからその勘違いは加速度的に広まっているのだが……！

「先輩、落ち着いてください！　この子は……」

「おおおお、俺を知つていたのか？」

「はい。だつてヒビキちゃんのスケッチブックにいっぱい描いてあつたから。ずっときれいな人だなつて……会つてみたいなつて思つてました」

うつ、今井くんの笑顔がまぶしつ！　キラキラと後光までさして見えるよ！　そしてそれは今の先輩にとつて目の毒だつ！

ちなみにこの愛らしきクラスメイトの少年は、名前の響子をもじつてあたしのことを「ビビキちゃん」と呼ぶ。

「ふ、ふふふ、そうか。 そうだろウー。」

先輩は大きな手で今井くんの両肩をつかんだ。

ちょっと先輩、なにする気？！

ところが今井くんはさらに不思議そうに首をかしげて先輩を見上げている。

「えと、川島先輩？」

今井くんがそう言つた刹那、さらに美術室の扉が乱暴に開かれた。いつたい今日はどうしたというんだろう？ こんなことならさつさと帰つておとなしくテスト勉強でもすればよかつた！

もう勘弁して、と振り向いたそこにはこれまで整つた顔立ちをした少年。

「こんなことにいたのか、シウン」

不機嫌そうに眉間にしわを寄せたのは、中性的に整つた顔立ちの少年……いや、実は少女だ。

クラスメイトの緋村琴音^{ひむらことね}。和風美人な名前とは裏腹に、空手部唯一の女子部員にして170cmオーバーのすらりとした長身、ボイイツシユな顔立ちで学校中の女子生徒を虜にしている。髪はベリーショート、常に男ものの服を身につけているせいで、今井くんとは対照的に男に間違われることが多い。

今井くんとは幼馴染で、はたから見れば付き合つているようにも見える。見た目性別が逆転しているとはい、非常に見目麗しい一人だ。美少女と美少年、並んでいても絵になる。

ところが現実は、しつかりした緋村さんがオトボケ今井くんの保護者をつとめている、というのが正解らしい（本人談）。

「あ、ひいちゃん。待つてて、少し絵を描いてから帰るから」

川島先輩に肩を掴まれたままの今井くんがボーアッシュな少女ににこり、と笑いかける。

その瞬間、少女の眉間の皺が倍増した。
「うつ、なんか……この部屋だけ気温が一瞬で氷点下？！ これぞまさにツンドラ気候？！」

「おいシユン、誰だ、それ」

「えーとね、川島先輩」

「んで？ 聞くが、そいつが何でお前に触っているんだ？」

幼馴染の少女の問いに今井くんはさあ、と可愛らしく首をかしげる。

突然の乱入者に驚いていた川島先輩も、はつとして今井くんの肩から手を離した。

首を傾げる今井くん。睨む緋村さん。そして慌てる先輩。
はたから見れば学校一のイケメンの先輩（？！）が可愛らしい少女に一目ぼれ。そこへ少女の幼馴染の少年が現れてあわや乱闘、みたいな？

何このベタな展開！ しかもいろいろ配役おかしいでしょ？！
いや、先輩は明らかに目の前の愛らしい子が「女」で、乱入者が「男」だと思つていいだろ？
だからこそ、厄介だ。

「いつたい誰だ？ 一緒に帰るとは、まさか恋人！ 君たちは恋人
同士のかつ？！」

3人の容姿を考えると、まるで恋愛小説のワンシーンのような光景。もし今井くんが女で緋村さんが男ならね。
愛らしい今井くんと対照的に非常に男前な緋村さんは、

「つるさーいな、こいつこそ誰だよ」

先輩ではなくあたしに向かつて聞いた。

この先輩を知らない女子生徒は荒神高校中を探してもあなた一人ですよ、緋村琴音さん。

仕方なく川島耕太先輩について簡単な解説をしてあげた。すると彼女はきょとん、とした顔をして川島先輩を指差した。

「耕太？ この顔で耕太？ 耕作の耕に太郎の太？」

「そ、そうだけど……た、太郎の太？」

「似合わねーつ！」

げらげらと爆笑する彼女は心の底から楽しんでいる。

いや、でも突っ込みどころはそこじゃないでしょ？

学校一のイケメン（自称と言いたいところだが本当なのが悔しい）

だと、バスケ部のエースだったとか、模試でもしばしば全国ランキングに名を連ねているとか……気を惹く話題には事欠かない先輩の、なぜわざわざ名前に突っ込む？！

しかもその瞬間にあたしのすぐ隣でツンドラ気候と正反対、熱帯ジャングルの猛暑が爆発した。

「……人が気にしていることをおおおー！」

え、先輩、自分の名前気にしてたの？！

（真ん中ストライクで先輩の傷を抉った緋村さん本人はすでに臨

戦態勢。冷やかな目つきで今井くんの向いに佇む先輩を見ている。

嵐の前のハロローグ（4）

「君は？……誰だ？！」

川島先輩がかるうじて絞り出した声に、緋村さんは今井くんを指差し、情の欠片もない声で言い放つた。

「！」「こつ、幼馴染み」

「うおおおー、幼馴染みかああああー！」

美術室の机に突つ伏して悶える川島先輩^{もだ}。

「そんな最強の称号を所持しているとはああ……誤算だつたあああ！」

「誤算も何も先輩はいつも計算なんてしてないでしょ！」

馬鹿だから。

ぼそりと呟いた言葉は先輩に届かなかつた。

「いや、俺にもポテンシャルがあるぞ。学校一のイケメンだというポテンシャルがな！ー！」

自分で言つてりや世話ないよ、とため息。

まあでも、この川島先輩が勉強できてスポーツで顔もいいナルリストなのに、みんなから慕われている理由はその辺にある。普通ならそんなキャラ、ただのイヤミになつてしまつ。

しかし、先輩は少し違う。イヤミがすべて本気なのだ。あたしの身長を心の底から心配してくれるほどに要するに、勉強はできるが少々おバカさん。男女構わず「うざがられ、面白がられて愛され

るところのある意味、恵まれたキャラクターである。

どちらにしても誤解は早く解かねばならない。

「だが、幼馴染みではあるが付き合っているわけではないんだな？」

「……」

「……」

緋村さんが一瞬口を噤む。

こんな時なのに、あたしは思わず頭の中の疑問をそのまま口に出してしまった。

「……あの、前から気になつてたんだけど

「ん？ 何だ？」

「緋村さんと今井くんとどうこうの関係なの？」

「だから幼なじみ。もしくは保護者。あとは……弟みたいもんかな

「恋愛感情とかはないの？」

そう言つと、緋村さんは目を大きく開いた。
そして、すぐにはじけるような笑みを見せた。

太陽のようなその笑顔に思わず釘付けになつてしまつ。学校中の乙女たちを虜にしている理由が何となくわかつてしまつた、ような……じゃなくて。

「ヒロキ、お前のそいつが好きだつー」

「?」

「どういひ意味？」

「アレ？ しかも今の何気に告白デスカ？ これ、緋村さんを崇拜する後輩の女の子たちに聞かれたらいじめ問題発覚だよ？ 鞍なく

なつて筆箱隠されて体操服切り刻まれて机に落書きだよ？

「聞きにくいくらいすばばずば聞く感じ？ 躊躇ないって言つかなんか
ずれてるよなー。しかもシユン本人の前で！」

そう言つあなたも本人の前なんですが。

当の本人、今井くんは完全に硬直してしまつていて。泣きそうに
大きな目を歪め、唇を引き結んでいる。この様子ではあたしたちの
会話が耳に入つていても微妙だ。

そんな今井くんをちらりと見てから、緋村さんはあたしの耳に唇
を近付けると、ぼそり、と呟いた。

「全くない、って言つとウソになるかもな。でも、今はこの関係が
いい」

「え？ それって……？」

「ほんとこうと、シユンがヒビキに懷いてるのもちよつと妬ける
んだよな」

にやり、と冗談めかして言つたセリフに一瞬どきりとする。

それは……牽制？

しかもこの距離。同性のあたしが惚れそうな微笑みが近づいてる。

「俺を無視するなーー！」

先輩の叫び声ではつと我に帰つた。

まあ何にせよ、誤解は解かねばならないだろ。

「川島先輩、今井くんは
「とにかく一人は付き合つてゐるわけではないんだな？！」
「聞いてください」

「といつ」とはまだ俺が入り込む隙もある「つ」と「つも」…」

「だから」

「負けん！！」

「人の話聞け」

思わず出た本音だったが、相変わらず先輩の耳には届いていないようだ。それどころか、今井くんは硬直しつぱなしだし、緋村さんは臨戦態勢。

「」の場にあたしの声が届く人間なんて存在していない。

「ヒ、ヒビキちゃん……ひーちゃんも川島先輩も、一人とも、ビッグちやつたの……？」

気がつけば今井くんはあたしのカーディガンの袖をぎゅっと握つてふるふると震えていた。

あーもう何？ このかわいい生き物！

君を取り合つていいんだよ、とも言えず、あたしは口を噤んだ。だけれども、とりあえずみんなのマスクシット兼ペットであるこの少年を、そしてあたしの目の保養と精神の癒しの対象であるこの愛らしい生き物を、川島先輩に渡すわけにはいかない！

と、思つてはいるのだが、真つ赤な炎の川島先輩と絶対零度の極寒冷気を放つ緋村さんとの間に割つて入る度胸はない。隣の今井くんと共にただオロオロするのみだ。

嵐の前のプロローグ（5）

「お前、じゃあシユンの誕生日知ってるのか？」

「うつ！ そんな幼馴染的な質問は許さんつー。」

「知らねーんだろ。今日だぜつー。」

「何いいいい！ 誕生日おめでとひ、シユンちゃんつー。」

ぐるり、と今井くんを見て極上の笑顔をキメる川島先輩。スマイル
が、祝われた本人は困惑したように言つた。

「僕……誕生日、冬だよ？」

その瞬間、笑顔は脆くも崩れ去る。

「騙したなあつ！ 貴様つー。」

「敵を騙して何が悪い！」

「ふむ、それもそつか」

つてか、何気にあの一人、会話が成立してる？！

すごいよ、緋村さん！ あの川島先輩とちゃんととした会話ができるなんて！ あたしなんて一年間ずっと通じないままだつたよ……むしろ君が川島先輩と付き合つちやいなよ！

「だが許さんつー！」

「じゃあシユンの好きな食べ物は？」

「きつとショートケーキに違いない」

「……つー！ 何で分かつた？！」

「愛だ！ はははははー。」

「じゃあ好きな花は？」

「うーむ。きっとアサガオだ。趣味は観察日記をつける」と…。「あほかあつ！ 小学生じゃあるまいし、ひまわりを育てて種を喰つ」とでした…。」「

その答え、すでに好きな花つてお題じやないよ？！ てか今井くん…ひまわりの種、好きなのね。そう言えれば以前、好きな画家はゴッホだと言つていた気がする。いや、特に関係ないとは思つが。それよりもやばい、このままじゃ終わらない。

隣で震える今井くんのためにもあたしがどうにかしなくては。

この時のあたしは、相当テンパつてたに違いない。そうじやなきや、ちゃんと川島先輩に今井くんが男で緋村さんが女だと伝えてしまつて、ハッピーエンドだつたのだ。

こんな風に、物語がスタートすることもなく。

「そんな問答やめてくださいよー もつと他に解決法があるでしょ
う？！」

あたしの必死の叫びは、なぜか一人に届いたようだ。
一人は言い争いを止めて一瞬こちらを向いた。

「ふむ、それはいい考えだね、風見響子さん
」「うだな。そうする事にしようつ

にやり、と二人が同時に笑つた。

「バスケットボールで」
「空手で」

「勝負だーー！」

二人の声がハモる。

どっちがどっちかは言つまでもないだろ？

本当に、この二人は……！

付き合つてしまえ、お前たち。

「なんだよお前、元バスケ部なんだろ？ バスケ勝負は不公平だろうが！」

「驚いたな！ 自分に自信がないからそういうことを言つたのだろう？」

あたしは、緋村さんがさつきの川島先輩紹介（＝元バスケ部だつてこと）をちゃんと聞いていたことの方が驚きです。

「何おうつ！ ヴァイオレンス・バスケにしようぜ！ それなら公平だろ！」

「いいだろう！」

何がいいの？！

ヴァイオレンス・バスケって何？！ 戰闘バトルありのバスケ？！ そ

れ一対一で出来るの？！ 何でそこ、話が通じてるの？！

「あと二人、仲間集めて来い！ 明日中にメンバー揃えて、明後日の朝、7時に体育館で待つつ！」

あ、30v3ルールなのね。
じゃないってば！

「望むところだ。俺は負けん！」

どうしてこんなことに……現況になつた可愛い少年はあたしの横で震えますよ？ ていうかあなたたち、もつ今井くんのことどうでもいいでしょ？ 勝負したいだけでしょう？！

それでも、今更止めるに止められなくなつたあたしは、今井くんと一人で硬直するしかなかつた。

「じゃあシヨン、そう言つことだから今日は一人で帰つてくれ！ 明日もなつ！」

「ええええ？！ ひいちゃん？！」

そう言つて片手をあげ、颯爽と去つていいく緋村さん。

「明後日の朝は君も来てくれよ、風見響子さん！ 審判がいないと試合にならないからね！」

「あたしに審判させる気ですか？！」

バスケのバの字も知らないのに、いきなりイレギュラールールのヴァイオレンス・バスケ審判なんて無理に決まつて！ ていうかそれ何？！ 誰か教えて！ つーか名前が超絶物騒なんですけど！

そしてお願ひ、誰か止めて！

あたしは心の中で叫んでいた。

違うんだ。あの場所にいた中で、唯一これを止められる可能性があつたとしたらあたし一人だつたんだ。誰かに頼んだつて無理だ。

その相手がたとえ神様としても。

だつて、今井くんと川島先輩が出会つたことも、そこへ緋村さんが乱入してしまつたことも……もし神様が仕組んだんだとしたら、神様も少女マンガみたいな物語ストーリーを望んでたんだろう。

その神様がこの無茶苦茶なプロローグを止めさせてくれるはずもない。

もし、神様に願つとしたらいいつだ。

「あたしを巻き込まないで！」

しかもこれがただのプロローグでしかなくて、あたしみたいな善良な市民を巻き込んだ物語がスタートするなんて、思つてもみなかつたから。

自分を守るには自分で頑張るしかない。

そんな簡単なことがなぜ分からなかつたんだろう！ 中学で学級委員を3年連続で押し付けられた時も、友達が誕生日にくれて大事にしていた傘をパクられた時も、可愛がつていた飼い犬のリリが死ぬ時も、世界はいつだって助けの手を差し延べてくれなかつたつていうのに！

嵐の前のプロローグ（5）（後書き）

短編をそのまま流用したら、長いプロローグになりました（＾＾；
次回から本編に入ります。

第一回戦 試合開始の笛が鳴る

あの悲劇的なプロローグから一日後、朝6時50分。

あたしは重い頭を無理やり叩き起こして体育館に向かつた。もつ、気が重くて仕方がない。

この時間なのに廊下に生徒が多いのは、きっと氣のせいじゃないだろう。

大々的にメンバー募集をしたのが学校一のイケメンと名高い川島耕太先輩と、女子生徒にカリスマの人気を誇る緋村琴音さんなのだ。注目を集めないわけがない。

いかに荒神高校が進学校と言えど所詮は高校生。お祭り大好き、イベント大好きでることに変わりはない。

がらり、と重い扉を開けると、早朝の体育館は、一人の決闘（？）を心待ちにする生徒で溢れかえっていた。

ふと、二階席の最前列に陣取る上級生の会話が耳に入ってきた。

「んで、何で川島は2年の緋村を敵に回したんだ？」

「さあ？ 本人に聞いたけど、あいつもいまいち覚えてなかつたみたいだぞ」

「まあ、仕方ないか。川島だからな」

「そうだな、川島だからな」

その会話で一気に脱力する。

やつぱり……もう勝負したいだけなんだよね、二人とも。もう今井くんのことなんてどうでもいいんだよね。合言葉は「川島だからな」 それだけで、先輩がどんな扱いを受けているか知れるというものの。

大きなため息をつきながら、バスケ部の有志によつてすでに用意されたコートに向かつていると。

「んーちがうやん！」

後ろから愛らしい声が追いかけてきた。

が駆けてきた。

「おはよう！ すごいねえ、ひいちゃんも川島先輩も人気者だね！ でも僕、ひいちゃんに勝つて欲しいなあ。川島先輩も嫌いじやないけど、ひいちゃんの方がもっと好きだもん」

思わず顔が引きつったのは、今井くんがさらりと緋村さんへの好

お菓子が詰め込まれていたからだ。

サンティーニがムはチニーレート それとジンが食へかけの
セイベイ お煎餅の袋まで入つてゐる。

「今井くん、後の……帽子の中、すこ事になつてゐるよ。」
「えつ？」

今井くんが慌てて後ろに手をやると、その反動でお菓子がぱりぱりと落ちた。

「わつ、うわつ！」

慌てて動く度にお菓子が体育館の床に散らばる。

もう一度ため息をついてから、一緒に拾い始めた。

「あのねー、たまにねー、フードにお菓子が入ってるんだあ。でも、

「んなに多いのは初めてだよー。」

実は、荒神高校の生徒の間で、今井くんのフードにお菓子を入れるというゲームが流行っている。

今井くんがまったく気づかず、それどころか『天使の分け前』と言つて喜んでいたため、その流行は全く収束を見せないのだが。今日はまた一段とひどい！ いや、今井くんが喜んでいるからむしろ豊作？

一生懸命拾つていると、上から大きな声が降つてきた。

「ああ、風見響子さん！ 試合を始めるよ。」

あああ、そんな大きな声で、こんなたくさん人のギャラリーの前で名前呼ばないでよ、先輩！

あたしはあなたと違つて穏やかな高校生活を望んでいるんですけど……。

などといつ心の声は届かない。だつて先輩には声に出したつて届かない。

なぜか空手着に身を包んだ緋村さんが完全に戦闘態勢で川島先輩に指をつきつける。

それだけでギャラリーから歓声が沸いた。

「手加減しねーぞ」

その言葉は、なぜか歓声に負けず、凜とこの空間に響いた。

緋村さんのチームはクラスメイトの葛葉くん（空手部員）と、桂くん（野球部のースピッチャー）。葛葉くんは先日の新人戦で地区代表になつたつて噂だし、桂くんもスポーツ万能の高校球児だ。

『どうやら織村さんが強引に誘つたようで、葛葉くんは眠い顔をこすつて『面倒くさがりな葛葉くんのことだ、そのうち『帰らうぜー』なんて言こ出すのは田に見えていた。

しかも、桂くんの方だって夏の大会が近いんだから野球部の朝練習があるはずだが。

多くの人の犠牲の上にこの試合は成り立っているんだろう。

「望むところだ」

対する先輩も不敵な笑みで応える。

二人とも見た事はないが、あ、違った、左隣で制服のままため息をついているのはついこの間までバスケ部のキヤプテンをやつていた大井先輩だ。川島先輩に無理やり引きずられてきたんだろう？…可哀想に。

もう一人は後輩だろうか。ちゃんとバスケット部のユニフォームを着ているあたり、生真面目で先輩の頼みを断れなかつたんだろうことは一目で分かる。

すると、あたしの元におそらく一年生と思われる坊主頭のバスケ部員が駆けてきて、ホイッスルを渡した。

何?
これ、
吹けつて?

はやくはやく、と目でせかす一年坊主に押されて、大きく息を吸い込んだ。

— — — — —

開始の笛が鳴った。

こうして、もう理由も目的も分からなくなってしまった勝負が、スタートしたわけである。

第一回戦 聞きたいのはそこじゃねえええ！

ヴァイオレンス・バスケたるものルールはいまいち分からないが、最初はジャンプボールと見せかけて……なんと、真ん中で緋村さんと先輩がじょんけんを始めた。

えつ？！ なんか名前の殺伐さと裏腹に微笑ましいんですけど？！

と、思ったのも束の間。

じょんけんの勝負がついた瞬間、緋村さんが先輩に向かって上段蹴りを繰り出した。

すれすれでかわした川島先輩は、手にしたボールを背後にいた制服の大井先輩に向かって投げる。

と思つた時には、すでに大井先輩の背後に回つていた葛葉くんが鋭い突きを繰り出していた。

「へつ？」

思わず間抜けな声が出た。

何これ？！ いつたい何が始まつたの？！

会場のテンションは最高潮！
ヤジと歓声が飛び交っている。

「避けんな、コーダあ！」

「先輩を呼び捨てにするんじゃないっ！」

その間も緋村さんの攻撃は止まない 上段蹴りから後ろ回し蹴

り、さらに連続足刀へのコンビネーション。

流石の川島先輩も防戦一方だ。

と、先ほどあたしに笛を渡したバスケ部の一年坊主がちょいちょい、
とその様子を指差す。

「どうやら笛を吹け、と言いたげだ。
仕方がないのでとりあえず笛を鳴らす。

「ピイイ〜〜フ」

「赤、ヴァイオレンス。オーバーアタック！」

はっ？！ もしや、今のは何かの反則？
慌てて隣の一年坊主に聞く。

「何、今、反則なの？」

「ボールを持つていない人に攻撃を加えるのはオーバーアタックと
いうヴァイオレンスです」

ヴァイオレンス、つて『暴力』……そのままじゃねえかああ！
はつ、いかんいかん。思わず笛を床にたたきつけるところだった。

「ほら、すぐ！ 笛！」

「ピイ〜〜」

「赤、ヴァイオレイション。トラベリング！」

ん？ ヴァイオレイション？ は、『違反』……しつちもそのま
まかよつ！
紛らわしいわあああ！

第一、全員動きが速いしボールがあちこち飛び回つてい
るせいで、スポーツなんて体育以外やつたことのないあたしには、
全く試合についていけない。

と、思った瞬間、葛葉くんの正拳突きがユニフォームを着たバスケ部2年の腹にヒットした。

手に持っていたボールはてんてんと床を転がる。

あつ、これさすがに殴ったんだから反則じゃない？

そう思つて勝手に笛を吹く。

「ピィィ～～」

ところが、一年坊主の口から出たのはむしろ葛葉くんのポイントを告げるものだった。

「赤、正拳中段突き、技ありつ！ 赤2ポイント！」

技ありいつ？！ 何だそれええ？！

すでにバスケじゃないよね。今の、バスケじゃないよね？！ 攻撃がジャストヒットしたバスケ部員は床に崩れている。その間に葛葉くんはボールを拾い上げて緋村さんにバスを回した。

「ちょ、えつ？ 今の、いいの？！」

「当たり前じやないですか。技の入り、タイミング、引き、気合い……完璧でしたよ！」

聞きたいのはそこじやねえええ！

つーかルール完全に把握してんなら、お前が笛を吹け！！ もう帰りたい。

田の前では制服の大井先輩と、ボールを持つた桂くん（高校球児）の間で目にもとまらぬ攻防が繰り広げられている。

桂くんがボールを庇つて防戦している間に、川島先輩が後ろからボールを奪う。

「ナイス・ステイール！ 川島つ！」
「川島先輩かつこいいーつ！」

観客から声援が飛び、ボールを持つた先輩はそのまま余裕でショートを決めた。

腐つても（腐つてないけど）川島先輩は元エース、それに元キャプテン大井先輩、現役バスケ部員の3人が相手なのだから、純粹なバスケでは、緋村さんチームに勝ち目はないだろう。

さあ、どうする……って、なに乗せられてんの、あたし？！

いつしか鳴り物まで登場して、発熱する会場。

ああ、もうみんな好きにして……

第一回戦 甲子園に連れてって！

「ピィ～～」

「上段回し蹴り、技ありっ！」

緋村さんの蹴りが、パスを受けた瞬間の大井先輩の頭に炸裂した。

「きやああああ！ 大井先輩 つ！」

「緋村先輩、がんばつて～！」

女子生徒から黄色い声援が飛ぶ。そして笛を吹くタイミングをつかんできたあたし。

しかし、緋村さんの蹴りを側頭部にものに受けながらも、大井先輩は立ち上がった。

そのままシャツの袖をまくりあげ、きつちりと止めてあつたボタンを2つほど外す。そして、軽く息を吐いてから体の調子を確かめるようにトントン、と軽くその場でステップした。そして、ずいぶん身長差のある緋村さんを見下ろした。

緋村さんだつて170cm以上はあるはずなのに……さすが大井先輩。2m近くあるんじゃないだろうか。そしてその頭部に蹴りを入れた緋村さんの身体能力は常軌を逸している。

つーか、大井先輩まで本気モード？！

あの川島先輩ともそれなりにつまくやつていたくらいに温厚な大井先輩が声を荒げた。

「板割ることしか能がない、空手部なんかに負けるかっ！」

「板なんか割つたことねーよ！ いや、割れると思うけどな？」

「ちつとは空手について勉強しやがれっ」

相手は先輩だというのに、緋村さんが口汚く応酬する。

ていうかあれ？ 空手つて板割るんじゃないの？

なんて素人大爆発の疑問には答えてくれるはずもなく、緋村さんと葛葉くんが順調にポイントを稼ぎ、一度も「ホールを揺らすことなく先輩チームと競^せっている。

ある意味このヴァイオレンス・バスケというゲームは彼らにぴったりの勝負だったのかもしれない。

ところが、この試合で唯一得点に絡んでいない人物がいる。

「がんばれっ！ 桂くん！」

ずっと隣で拳を握つて応援していた今井くんの愛らしい声援が飛んだ。

そう、野球部員の桂くんは戦闘^{バトル}でも籠球^{バスケ}でもまったく得点に絡めないでいたのだ。まあ、それは……仕方ないっちゃ仕方ないのだが。とても女性と思えない身体能力を発揮している緋村さんをはじめとして、完璧なタイミングで攻撃を仕掛ける葛葉くん、それにバスケ部員3人の中に入つてしまつては、このルールで高校球児の活躍の場などない。

「ひいっ。赤、ヴァイオレイション。インターフェア！」

鋭い一年坊主の声が飛ぶ……つて、あたし笛吹いてないよ？！

いま、自分でぴーって言ったでしょ、そこの一年坊主！

勝手に審判し始めた一年坊主の首にこつそり笛をかけておくと、彼は気づかずにそのまま笛を持ってコートを駆け回り始めた。

よし、これであたしがいなくなつても大丈夫……

「ヒジキちゃん、桂くん大丈夫かな……？」

「うそり逃げようと思ったのに！」

逃げようとしたあたしの服の裾を、今井くんがしっかりと握っている。

そんなうらうらした瞳で見つめないで！

「桂くんだけまだ一点も……しかも、焦つてるみたい」

確かに彼は先ほどから反則を連発している。

きっと自分だけ役に立つていないと焦りからだ。

「赤、ヴァイオレンス。オーバーアタック！」

とうとう桂くんはボールを持たない川島先輩に攻撃を仕掛け、反則を取られてしまった。

「何だよ……あいつだけ足手まといじやん」

「ゲームに水差すなっての」

観客の心ない陰口。

桂くんがぐつと歯をかみしめた時だった。

観客席から凄まじく大きな声が降ってきた。

「桂 つ！」

会場にいた全員の視線が集中する。

そこには、顔を泥まみれにした野球少年の姿が あたしの記憶が確かに、あれは野球部の時期キャプテンと噂され、桂くんの女

房役に当たるキャッチャーの相馬くんだ。

朝練習を途中で抜けてきたのか、大きく肩を揺らして息を整えて
いる。

「なつ、相馬？！」

驚いた顔の桂くんに、相馬くんが何かを投げる。

遠くてよく見えないが、どうやらあれは……野球のボール？

「使え、桂つ！ 野球部の底力、見せてやれ！…」

「相馬……」

ぱし、とボールを受け取った桂くんは、そのボールを大事そうに胸に抱え、そして唇を引き結んだ。

「つおつしゃあああ！ 野球部なめんなああ！」

彼は気合い一閃、大きく振りかぶった。

か、桂くんの背後にマウンドが……甲子園が見えるつ？！

「甲子園に……」

Hースピッチャーの投球。

「つれてつてええええ！」

田測150km/h！

まっすぐに飛んだ剛速球は、ユニークなフォームを着たバスケ部2年の腹に鈍い音を立てて突き刺さった。

そのまま後ろ向きに吹つ飛び姿を、会場の全員が声も出せずに見

守っていた。

静まり返る体育館。

はつとしたあたしはとりあえず笛を吹いた。

第一回戦 親友の某暗殺者くん

「ピ——ーッ」

あれつ？！

ちょっと待て、なぜに笛があたしの手元に戻つているんだ？！
と、思つたら二つの間にか隣に戻つてきていた一年坊主が叫んだ。

「赤、武器使用により退場！」

つて、えええええ？！
ポイントじゃないの？！

「武器使用つて一発退場なの？！」

しまつた、突つ込みたかったのはそこじゃないのに！

「当たり前です。そうしないと、みんな火縄銃やククリ刀を使いだして收拾つかなくなります」

「……それが野球のボールでもダメなの？ ていうか火縄銃？ これ、どこの国のスポーツ？ ていうか本当にこれスポーツ？」

「例外は認めません」

ああ、そんな……ようやく桂くんが活躍の場を見出したつていうのに！

あつ、ちょっと待つて、あたし感情移入しだしてる？！ このハチヤメチヤな状況を呑みこみつつあるの？ ああ、嫌だつ！ それだけは嫌だ！

「桂くん……かつこよかつたね」

ぱつり、と隣の今井くんが呟いて、にこりと笑った。

ああ、その笑顔だけでもきっと桂くんは救われると思つよ。

会場内を割れんばかりの拍手が渦巻いている。

桂くんの勇姿を湛えて。

その桂くんは、照れくさそうに観客席の相馬くんに向かつて手を振ると、体育館を後にした。

その後、エースピッチャーの直球を食らつたバスケ部員は戦闘不能で退場。

川島先輩・大井先輩の3年バスケ部チームと緋村さん・葛葉くんの2年空手部チームで勝敗を喫することとなつた。

「時間ねーぞ、緋村つ」

最初は眠そうな顔をしてたくせに、いまや汗がきらめくと輝いて完全に青春真っ只中！の真剣な表情をした葛葉くんが緋村さんに檄を飛ばす。

緋村さんはそれを聞いてきゅっと眉を寄せた。

「分かつてゐやつ」

試合は先輩チームが一歩リード。

とはいえる、すぐでもひっくりかえせる点差だ。

「一か八か、ゴール狙うぞ、葛葉！」

「おうよつ！」

阿吽の呼吸で同時にダッシュした緋村さんと葛葉くんは、それぞれ川島先輩と大井先輩に飛びかかっていった。

いつの間にかラブコメでなく青春スポーツマンガへと変貌を遂げていることに、あたしは突つ込みを入れる暇もなく。目の前の試合は佳境を迎えていた。

「バスケ部に純粋なバスケで敵うと思つな！」

大井先輩があつさりとドリブルで葛葉くんを抜いていく。

「しまつ……！」

3対3だったというのに（今は既に2対2だけど）、コートはフルコート。

30分近く走り続けた葛葉くんの足は限界に来ていたようだ。足をもつれさせて盛大に転んだ葛葉くんを振り向きもせず、大井先輩はゴールへと向かう。

先輩の手から放たれたボールは、音もなくリングを通り抜けた。お手本のようなショートだ。

「……！」

残り時間が少ないこの状況で点差が開くのは絶望的だ。緋村さんも荒い息を整えながら、床に転んだまま起き上がりえないでいる葛葉くんの元へと向かつた。

「大丈夫か？」

「……すまん、もつ足が……」

「うやうう葛葉くんも限界のようだ。立ち上がる」とすらままならない。

「ありがとな、葛葉。お前はここで待つわ」

「どうする気だ？」緋村

緋村さんが葛葉くんの耳元で何かを囁くと、葛葉くんの表情がぱつと輝いた。

「まじで？！ それ面白いぜ？！ ってか、俺キルアじゃん！！！ やつたー！」

「へ？ キルア？ あれですか？ 休載が売りの某連載漫画の？」

あー、そろそろ続き読みたいです。

ってそんなことはどうでもよくて。

「よし、任せろ、緋村あー！」

「おう、頼むぜー！」

「コート外からのスローライン。

思いきり投げたボールは、コートの中央あたりに座り込んだ葛葉くんに届いた。

第一回戦 試合終了の鐘が鳴る

ボールを受け取り、高く掲げた葛葉くん。そして、投げてすぐ中央まで走り、葛葉くんの前で腰を落とし構えた緋村さん。なんだか引いた拳に気を集中させているように見える。

もしや、アレですか？！ ドッジボールの試合で某漫画の主人公と親友の暗殺者くんがやつてたアレですか？！

「そんな思いつきの技が通用するとでも思うのか！」

「やつてみなきや！」

緋村さんがカツと目を開く。

ボールを頭上に掲げそれを待ち受ける葛葉くん。

つーかボール持ってるんだからバスケらしく普通に投げようよ…
…なんてあたしの声は誰にも届かない。

「わかんねーだろつー！」

繰り出された正拳突きが正確にボールの真芯を捕えた。

凄まじい勢いで飛んだボールはそのままバックボードに激突し、そして、その反動で大きな音を立ててゴールリングを通り抜けた。

「ピイイーーーっ！」

文句無しの得点。

そして、両チームの点差は1点だ。

残り時間はとっくに1分を切っている。

しかし、何とここへきて、先輩チームに焦りが出てしまった。

何と大井先輩が痛恨のパスミス！

ボールの所有は緋村さんチームへ。

もちろん彼女はすぐにそのボールを葛葉くんへ。

これが入れば逆転だ。

「次はオリジナルな！」

そう言つて緋村さんは助走をつけて飛び上がつた。
まさか今度はボールを蹴る気？！

「させらかあつ！」

ところがなんと、大井先輩が葛葉くんにタックルをかました！
笛を吹こうかと構えたが、そう言えればボールを持つてゐる人への攻
撃は反則じゃないんだつた。ああ、ここへきてアグレッシブだなあ、
大井先輩。

ボールを持つ葛葉くんの体が衝撃で倒れる。

何とか体勢を立て直したものの、予想外の攻撃に、ボールの位置
がずれている。

すでに蹴る体勢に入つていた緋村さんは、葛葉くんだけは当たら
ないようとに無理やり蹴りの軌道を修正した。

体勢を崩しながらもなんとかボールに蹴りのインパクトを持つて
きたが

「しまつた！」

ボールはと言つと、狙いよりも低く飛んだがために、ゴールとのラ
イン上で待ち構える川島先輩のもとへまっすぐ飛んだ。

「川島、避ける！」

大井先輩の声もむなしく。
制御を失ったボールは、先輩の顔面にめり込んでしまった！

「ぱちいん！」

あつちやあ、綺麗な顔が台無し……じゃなくて、すゞい音したけど大丈夫？

顔面でボールを受け止めた川島先輩は衝撃を止めきれず、そのまま後ろに大きく仰け反った。

観客席から悲鳴が上がる。

緋村さんは大きく目を見開いた。

「つーーー！」

残り時間は数秒。

もう勝負は決まつたものと、そこにいた全員が思った。

ところが。

「がんばれ、ひーちゃん！」

今井くんの声が響き渡つた。

彼はあきらめていなかつた。彼だけは、時間いつぱいでもまだ希望を捨てていなかつた。

ひいちゃんに勝つて欲しいな 試合前にやつひつた彼の必死の叫びは、きっと彼女の心に届くはずだ。

「シユン……」

会場の割れんばかりの声援と悲鳴を越えて、緋村さんの声がそう動いたように見えた。

その瞬間、緋村さんの瞳に闘志の炎が戻つてくる。

「まだ終わつてねえ！」

川島先輩の顔の上に乗つてゐる状態のボールを見据え、大地を蹴つた。

「ひいちゃんつ！」

緋村さんは、最後に今井くんを見てにこりと微笑んだ。

一瞬なのに瞼の裏に焼きつくくらい、魅力的な微笑みだつた。

「くらえつ、必殺……」

まるで羽根でも生えているかのように、緋村さんは軽く宙を舞つた。

そのまま体を捻つて先輩の顔の上のボールに狙いを定める。

「ウイリアム・テルつ！」

息子の頭の上の林檎だけを射抜いたかの有名なウイリアム・テル

のように、先輩には全く触れずにボールだけを正確に蹴り飛ばした
緋村さんは、その反動で背中から床に落下した。

ボールは真っ直ぐにゴールへ飛んだ。

ががん！

凄まじい音がして、ボールはバッくボードに激突する。
そのままリングとの間で跳ねまわる。

会場中がそのボールの行方を日で追つていた。

少しずつ、少しずつボールの動きは収まっていく。
そして。

ボールがリングを通り抜けたその瞬間、あたしは、思いつきり、笛を吹いた。

— ८ —

その音は体育館中に響いて、まるで一瞬だけ時が止まつたかのように静けさがその場を支配した。

響くのはボールが床を転がる音だけ……

緋村さんの雄叫びが上がる。

嬉しそうにぴょんぴょんと飛び跳ねる今井くんは、きっと勝利の

女神（？）だ。

またフードからチヨコレートが飛び出しているけれど、今は教え
ないでいてあげよう。

すべてが終わった……と思つたあたしたちの耳に、現実の鐘の音
が響き渡る。

そう、予鈴チャイムだ。

だつて今日は

「しまつたああああ！ テストがあああ！」

その川島先輩の雄叫びで、体育館内は騒然となつた。

慌てて教室へ向かう者、焦りすぎて一階席から落下する生徒、そ
して動転したのかおもむろにモップ掛けを始める生真面目なバスケ
部員。

それでもなぜか全員がテストに間に合つなかつ席に着いたのは、奇
跡としか言いようがないだろう。

テストの結果がどうだったかは別として。

第一回戦 乙女心と夏のソラ

「はああ～、疲れたつ

どうにか3日間にわたるテストを終え、あたしの後ろの席でぐつたりと机に突つ伏したのは、あの対決以来さらにファンを増加させている緋村さん。

今も教室の外では下級生の女の子がちらちらとこちらを窺つてたりする。

そして、あたしに向けられる視線はちくちくと痛い……もしや、上履きがなくなるのは時間の問題か？

「……お疲れさま

苦笑いで返すと、緋村さんもちょっと眉を歪めた。

「なあ、ヒビキ。結局あいつ、なんだつたんだ？」

あいつ[＝]川島先輩。

「うーん、それは……」

「」もつた瞬間、ビビビ、と大きな足音がして、教室の扉がばたん！ と開いた。

嫌な予感。

恐る恐る振り向くと、そこにはあたしのスケッチブックの大半を占める顔があつた。

鼻の頭に絆創膏をはつてるのは、3日前の試合で顔面にボールを受けたせいだろ。まあ、そんなものきっと川島先輩にかかるば

『俺の美貌を損ねる理由になりはしない』のだらうが。

その先輩は颯爽と教室に入つてくると、机にぐつたりと突つ伏している緋村さんにびしつと指を突き付けた。

「今日は負けたが次は負けんぞ！ 緋村あああ！」

あれ、先輩はその名前をどこで覚えたんだろ？

そして、つかつかと今井くんに歩み寄り、どこから取り出したのか小さな赤の髪留めをぱちん、と彼の柔らかそうな髪に留めた。

「そしてシユンちゃんに誕生日プレゼントだ」

「あ、ありがとう先輩！」

うわあ、可愛い笑顔向けちゃつてるよ。つていうかそのくアピン可愛いんだけど。もうなんか女の子にしか見えないんだけど。つていうか、クラスの誰か突っ込めよ。

と思って周囲を見渡したが、誰も関わりたくないんだろ？ もしくは面白がつてわざと教えないでいるのか……みな遠くから見守るだけだ。

「でもね先輩、僕の誕生日は……」

その瞬間、絶対零度、ツインデラ気候の空気を纏つた緋村さんがその間に飛び込んだ。

「シユンは渡さんつーーーお前、勝負に負けたくせに往生際がわりーぞ！」

「誰が一回勝負だと言った！ 次は駅伝で勝負だ！」

「なにいーつ？！ ただの駅伝じゃ面白くないから、フラッシュユーティ

算駅伝にじょいざー！」

「『』の俺に算数で挑もうとは笑止千万！　返り討ちにしてくれるわあ！」

「お前らは小学生か」

ぼそりと呟いたが、やつぱり誰の耳にも届かない。あたしの声を聞いてくれる人は、この先現ってくれるんだろうか。はあ、と大きなため息をつくと、つんつん、と肘のあたりが引っ張られた。

振り向けば、そこには泣きそつた顔をした今井くん。

「……ね、ひいちゃんと川島先輩、なんでもまた喧嘩するの？」

それはね、君を取り合っているんだよ……相変わらず口には出せず、心の中で飲み込んでしまった。

「お前にシユンの何が分かる？！」

「無論、何でも！」

「じゃあシユンの親父の名前は？」

「健太郎つ！」

「はずれ！」

「では健一だな？！」

「違う！」

「健三郎つ！」

「それも違う」

「健四郎！」

「どんだけ『健』好きなんだつ。正解は『耕太』でしたつ！　耕作の耕に、太郎の太つ」

その瞬間、先輩の額に青筋が浮かぶ。

「その名を呼ぶなああ！」

ホント仲いいよね、ここの一人。だからお前たちが付き合えばいい（シンンドリーちゃん風）。

またもめちゃくちゃな言い争いを始めてしまった二人を見ながら、今井くんに尋ねてみる。

「ちなみに今井くんのお父さん、本当は何で言つの？..」

「健太だよ」

「ひへ、二ノミズ？..」

「でもや、一人とも、またあんな風に戦つたりするのかなあ」

終わる事のない言い争いを見てため息をついた今井くんの為に、「ここの争いをやめる」という選択肢はある一人にないのだろうか。が、今井くんはこじりと笑つて、言つた。

「うん、でもひへちゃんは負けないよね。だつてすつこくへ強いもん！」

そんな今井くんの笑顔は、あの最後の瞬間に見た緋村さんの笑顔とダブつて見えた。

お互いを信じる事が出来る、それこそが幼馴染のポテンシャルなんだろ？。

可愛い今井くんと、カッコいい緋村さん。きつと一人はこれでバランスがとれているに違いない。そう思つたら、知らず、笑みがこぼれていた。

次のモチーフは、あの時の彼女の笑顔にしよう。
うん、きっとそれがいい。

そして、今井くんのスケッチの隣に飾るとしよう。

窓の外には、あたしたちの物語^{ストーリー}を飾るのに相応しい、最高の青空
が広がっていた。

第一回戦 ノ女心と眞のソワ (後書き)

ここで第一回戦終了です。と、同時に短編連載部終了でもあります。

次回から、連載本編(?)となりますが、最後まで書きあげてい
るわけではないので、亀の歩みになるかも……気長にお待ちくださ
い m(—)m

第一回戦 聞きたくない警鐘

テストは終了、そしてあたしにも17歳の夏がやってきた と、いつても彼氏なんているわけでもなく、友人がとてもなく多いわけでもなく、家族そろって海外旅行するような金持ちでもないあたしは、平凡な夏を過ごす予定でいた。

とはいって、夏休み明けのコンクールに出演する作品を仕上げる気ではいるのだが。

終業式が終わった教室で、カバンに荷物を詰めながら外を見れば、梅雨明けの真っ青な空があたしを見下ろしている。

がやがやと騒がしい教室で、みんな夏休みの遊ぶ予定でも立っているんだろう。

その中にひとりわざと立つ高いトーン。

「ねえ、ひいちゃん。今度のねー、日曜日になー、コンクールがあるのー 見に来てね！ 絶対来てね！」

大きな身振り手振りで懸命に主張しているのは、前回の試合でクラスのマスコットから全校のマスコットへと進化を遂げた今井俊太、16歳『男』。チャームポイントはつるると大きなこげ茶の瞳、さらさらの茶髪、それから 3年の先輩に一日ぼれさせるほどの強力な笑顔。

「おー、もちろん行くぜー！」

「ふと笑つてそれに答えたのは緋村琴音、17歳『女』。つい先日、全校生徒を巻き込んだヴァイオレンスバスケ・バトルで見事勝利した彼女は、中性的で美少年然としたその容姿とオトコマエな性格、それに現役バスケ部員をものともしない人並み外れた身体能力

で一躍ヒーローと化した（ヒロインではないところがポイント）。

「一緒にいづか、ヒビキ！」

そしてそんなヒーローに声をかけられたあたしは、いたつて普通の凡庸な一般市民。

繰り返しになつたつていい。馬から落馬。頭痛が痛い。それくらい主張したいことなのだから。

まあ、そんな事はどうでもいいけど、あたしは大人しく目立たず高校生活を送りたいのだ。出来る事なら声をかけないで……

「えつ、ヒビキちゃんも来てくれるのー！」

あたしの心は、愛らしい少年の一言で打ち碎かれてしまった。やつぱりかわいい。かわいすぎるよ、今井くん。すぐにでもケースに入れてしまつておきたいよ。どんな人形よりもきっとあたしの事を癒してくれる。

そんな風にして拳を握りしめたあたしが人知れず悶えていると、突然、背中に体重がかかり、顔の横にすらりと引き締まつた腕が一本、伸びてきた。

「行くよな、ヒビキ！」

「ちょ、緋村さん、近いつ……！」

顔を横に向ければ、太陽のよつに輝く緋村さんの笑顔。しかも頬が触れるほどに近い距離。

え、何これ、わざと？

窓一枚隔てた廊下では、緋村さんを崇拜する後輩の女の子達がさ

ながら王蟲^{オーム}の進軍の如くびつしり張り付いているつて言うのに？

この人は、あたしの平穏な生活をぶち壊したいのだろうか。つい今朝、一人で登校したあたしの下駄箱に入っていた、あまりにも短絡的な暴言を殴り書きした一枚の紙切れはなかつた事にするとしても。

「行くよな、ヒビキ？」

「……はい、行きます」

再び返された問いに、答えは一つしか残されていない。
ああ、どうしてこんな事になってしまったんだろう！

何度も何度も叫んだ台詞は、夏休みの前に全く相応しくないものだった。

二人と家が反対方向なのは不幸中の幸い、これで一緒に帰ろうものなら、あたしに向けられる女の子たちの嫉妬は、あたかも弁慶に降り注いだ矢の如く全身に突き刺さるだろう。

いやみを紙に書いて来るなんて、まだまだカワイイものだ。なんて、あたしが余裕でいられるのには理由があるんだけれども、それを思い出すのはやめておいた。こんな夏の空の下で思い出したい記憶じやない。

「次の日曜日、ね」

ぱつり、と呴いて、あたしは自分がそんなにも嫌がつてい無い事に気付いた。

今井くんの、そして緋村さんの笑顔を思い出す。

女の子の視線抜きに考えて、緋村さんは本当に素敵な女性だと思

う……素敵な方だと思います。

誰もが惹かれるのが分かる気がする。それはあたしだって例外じゃない。

これまでクラスで特定の友人を作つていなかつたあたし。もちろん緋村さんも今井くんも知つていたし、何度も話したことだつてある。でも、それは他のクラスメイトと同程度。目立つ子たちだなあ、なんて見ていただけ。

それなのには、夏休みに約束までしている。
不思議なものだ。

どれもこれも

「やあ、奇遇だね、風見響子さん！」

ああ、何でこんなところでこの声を聞く事になるんだろう。

振り向いたあたしの目に飛び込んできたのは、すべての元凶。なんだかバックに花（それも仰々しいアマリリスあたり）が飛んでいるように見えるのはあたしの目の錯覚よね？

才色兼備、文武両道。自他ともに認める荒神高校一のイケメン。元バスケットボール部。運動神経抜群、すらりとした長身のモデル体形だが、頭の中身はちょっと足りない。それなのに、全国模試のランキンギに名を連ねているのはどういう理屈なのか。

そんな川島耕太先輩、高校3年受験生『男』は、なぜか顎に手を当て、にやりと笑つた。

「ふふふ、俺は夏休みも毎日登校しているから安心したまえ！」

「唐突に何を言い出すんですか？ 安心の理由と必要性を一萬字以上で説明してください」

いつも通りあたしの台詞にはお構いなし、そわそわとあたりを見渡すと、あたしの方に視線をくれもせず言った。

「ああ、ところで何だが……ショーンちゃんは？」

ああもう、全くこの人は相変わらず……！

怒りを腹の奥まで飲み込んで、深呼吸。

身長151cmのあたしからするとずいぶん上の方にある先輩のオトコマエな顔を見上げながら返した。

「今井くんなら反対方向ですよ。残念で……し……た」

反対方向、と聞いた瞬間の川島先輩の顔は、思わずスケッチしたいくらいの崩れっぷりだつた。ああ、いい男が台無しですよ、先輩。形のいい、左右整つた目が悲しそうに歪められ、泣くのを堪えるように口をへの字に曲げた。

もつたいたい。

「そりか……そりだつたのか……てつきり一緒に帰つているものだと……」

先輩は今にも地面に沈みそうなほど頑垂れている。珍しく学外で声をかけてきたと思ったら、今井くん曰くですか。ああ、そうですか。

と、思つて冷ややかな目で見下ろしていふと、突然川島先輩はぱつと顔を上げた。

「いや、大丈夫だ、大丈夫だぞ！」

「何がですか？ 先輩の話の聞かなさ具合は大丈夫じゃありませんか

らね？」「

「俺は、今週の田曜日、ショウちゃんがコンクリート柱に当たるところの噂を手に入れているのだ！」

その言葉にあたしは愕然とした。

どこの情報ですかー？！ だれ、そんなピンポイント情報を川島先輩に流したのは？！

やばい。やばい。

あのヴァイオレンス・バスケの時と一緒にだ。あたしの頭の中で警報が響き渡っている。

第一回戦の予兆は、この時既に始まっていたのだ。

お知りせりお読み

まことに勝手なことではあります、『ラブコメは他所でやつて！serial addition』の連載を打ち切ることになりました。

大変申し訳ありません。

「ラブコメは他所でやつて！」はシャッフル企画で書きあげた短編で完結、と思つていただければ幸いです。続きは少しばかり書いてはいたのですが、完結まで書ききる気力がありませんでした。

お待ちいただいていた方がいらっしゃれば、申し訳ありません。

今後とも、よろしくお願ひいたします。

早村友裕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6413e/>

ラブコメは他所でやって！ serial addition

2011年6月19日15時47分発行